

いつかある人にこんなことを聞かれたことがあるんだ。
例えば、こんな星空や、泣けてくるような夕日をひとりで見ていたとするだろう。
もし、愛する人がいたら、その美しさやその時の気持ちをどんな風に伝えるかって。
写真をとるか、もし絵がうまかったらキャンバスに描いてみせるか、
いや、やっぱり言葉で伝えるかな。
その人はこう言ったんだ。自分が変わっていくことだって。
その夕陽を見て、感動して、自分が感動して変わっていくことだと思ってる。

星野道夫著 「旅する木」より

学校の役割 :【Vision：実現したい未来】：感動が自分をあきらめさせない

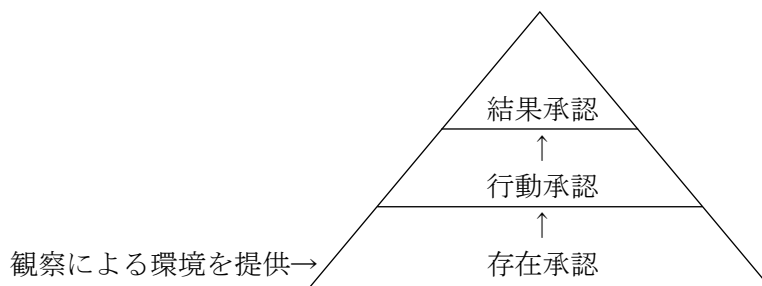
「わたしたちは、生徒を変える。」

不確実で多様化する世界において、多様な価値観の理解と共感的な人間関係の構築による自己存在感や自己肯定感、自分により良い選択ができる自己決定を体現させる。そして、実社会や実生活において、何か、誰かのために、新たな価値をつくり出すことができる力をつける。

→ 「人は自ら変われるが、人を変えることはできない。」 選択理論：ウィリアム・グラッサー博士

- 「選択理論」は、人は外部からの刺激に反応するのではなく、内的な動機づけ（5つの基本的欲求：生存、愛・所属、力、自由、楽しみ）に基づいて自らの行動を選択しているという心理学の理論。この理論は、問題は人間関係の不満から生じると考え、過去ではなく現在に焦点を当て、より良い未来を選択することを目指し、リアリティセラピーの基盤にもなっています。人は自分の行動（行為・思考・感情・生理反応）のうち、「行為」と「思考」は直接コントロールできると設定し、外的コントロールを受けるのではなく自らの選択により関係性を改善することを重視することから、すべての行動は自らの選択であると考えられる心理学です。自らの行動を選択できるのは自分だけです。自らの行動は他人に選択されませんし、他人の行動を選択させることもできないと考えます。そのため、問題が発生した時には、相手を受け入れ、自分との違いを交渉することで解決します。

- 「行為」「思考」の直接コントロール



生徒を究極までに観察し、環境を用意する。そして、存在承認を続けること。

■ 思いやりを示す7つの習慣

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. 傾聴する | → 批判する |
| 2. 支援する | → 責める |
| 3. 励ます | → 文句を言う |
| 4. 尊敬する | → ガミガミ言う |
| 5. 信頼する | → 脅す |
| 6. 受容する | → 罰する |
| 7. 意見の違いについて常に交渉する | → 自分の思い通りにしようと褒美で釣る |

1 学校教育目標

「校是 自立と貢献」

～目指す学校・生徒・教師のすがた～

自立：自分の力で考え、理解、判断（選択）し、行動する力

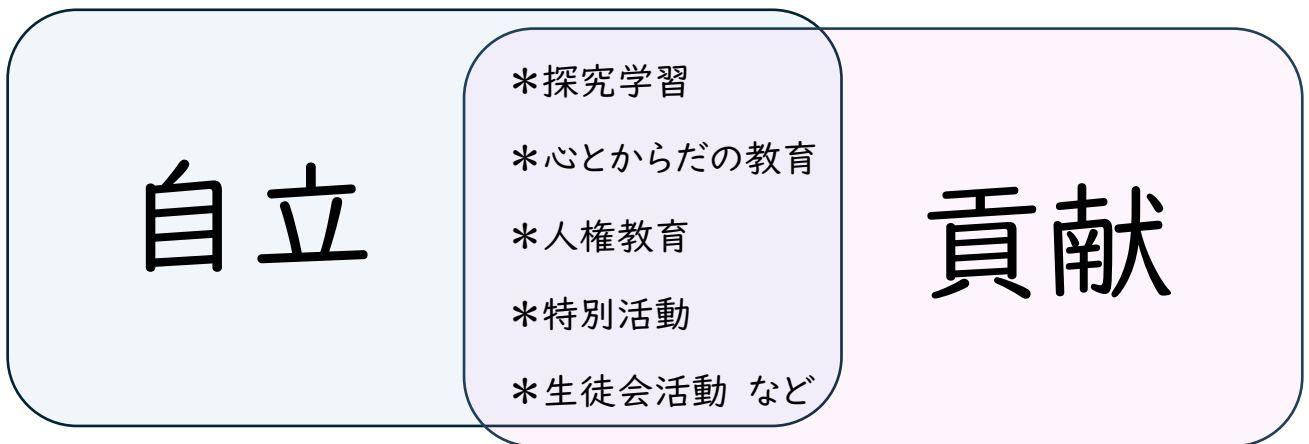
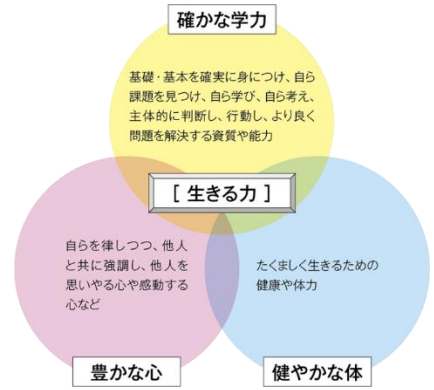
【自己存在感・自己肯定感・自己決定（自己選択）】

主体性を育むと共に、自分の力で「うまく人に頼ることができる社会的自立力を育てる
→「確かな学力」「健やかな体」の育成につなげる

貢献：実社会や実生活において何か「誰か」のために、新たな価値を作り出すことができる力

【自己存在感・自己肯定感・自己決定（自己選択）】

探究活動を通して、学びを実社会や実生活に活かす、新たな価値を創造する自己指導能力を育てる
→「豊かな心」「健やかな体」の育成につなげる



2 育てたい生徒の姿：生きる力の育成「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」

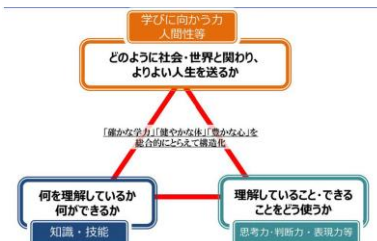
○「ああ なんて素敵な日(学校)だ」とこころから**感動**し、あきらめない充実した学校生活を過ごそうとする姿。

↑ この姿を生徒に選択させる

そんな生徒の姿を創るために…「育成を目指す資質・能力の三つの柱」を具体的に意識し設定する。

○「素敵な日を生きる＝**感動**が自分をあきらめさせない！」

キーワードは「**感動**」…生徒が取り組む教育活動、指導法の検討と開発



生徒：自らの「良いところ」を見つけ伸ばし、自らの「課題を**選択理解**」し、粘り強く解決する姿勢や過程を通して、自己存在や自己決定、自己実現を体現する。

教職員：生徒の「良いところ」を見つけ伸ばす指導、生徒に「自己の課題を選択理解」させ、その解決に向け、粘り強く取り組ませる指導、その姿勢や過程を支える
 ＊あきらめさせない だから私たちはこの仕事が好きになる

あきらめる	→出来ない、面倒だから…
あきらめない1	→何とかしたい、もう少しだから、前はできた…
あきらめない2	→冷静に分析しながら行動できるから大丈夫…

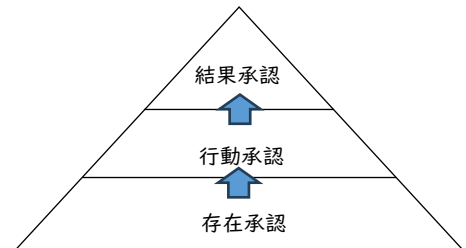
卒業時の生徒の姿は…

① 自ら変わろうとする生徒

感動

→①～③の繰り返しで、生徒が自ら変わろうとする意欲を育てる

- ① 信頼できる先生がいることで相談することができる
- ② 自分が考えていることや、行動したことを認め、褒めてくれる先生がいることで自信がつく
- ③ やって見た結果を先生と振り返ることで、やってよかったと思えて、次の課題を発見できる



② 共感的な人間関係の創造

感動 + あきらめない1

- ① 日々の授業や取り組み、行事等を通して、自分の存在価値を感じ取れる（自己存在感）
- ② 先生や友達・部活の仲間など人との関わりを通して自己理解を深め自分のよさに気付く（自己肯定感）
- ③ 様々な選択肢の中から自分により選択ができる（自己決定、自己選択）

③ 実社会や実生活において、何か「誰か」のために、新たな価値をつくり出すことができる力を

つける

あきらめない2

- ① 授業での「問い」に対して自分の考えを持つ
- ② 他者の考え（先人の考え）に触れて、自分の考えとの違いや新しい視点に気付く
- ③ 自分の考えと、他者の考えを比較して新たな価値観（考え）を創り出す

3 目指す教職員の姿

【Mission：果たすべき使命】：素敵な日を生きる「生徒のできる」を増やす

- ① だから、究極な観察力で深く考える
- ② だから、生徒の良いところを見つけ伸ばし、「自己の課題を選択理解」させることができる
- ③ だから、あきらめない、解決に向け、粘り強く取り組ませる支援ができる
- ④ だから、あきらめない粘り強く取り組む姿勢や過程を支える支援ができる
- ⑤ だから、常識や過去にとらわれない
- ⑥ だから、この仕事は限りなくひろがっていく

4 令和8年度の目指すもの

●総合的な学習の時間に大切な感覚

遊園地型教育から「原っぱ型教育」：鷲田清一

2015年2月22日の京都新聞に掲載された「市立芸大の移転を転機に、さらに発展する『大学のまち京都』」での言葉

これまでの教育では教える側が多くのメニューを用意していた。ジェットコースターかメリーゴーラウンドかを選択するだけの、いわば遊園地型の教育。

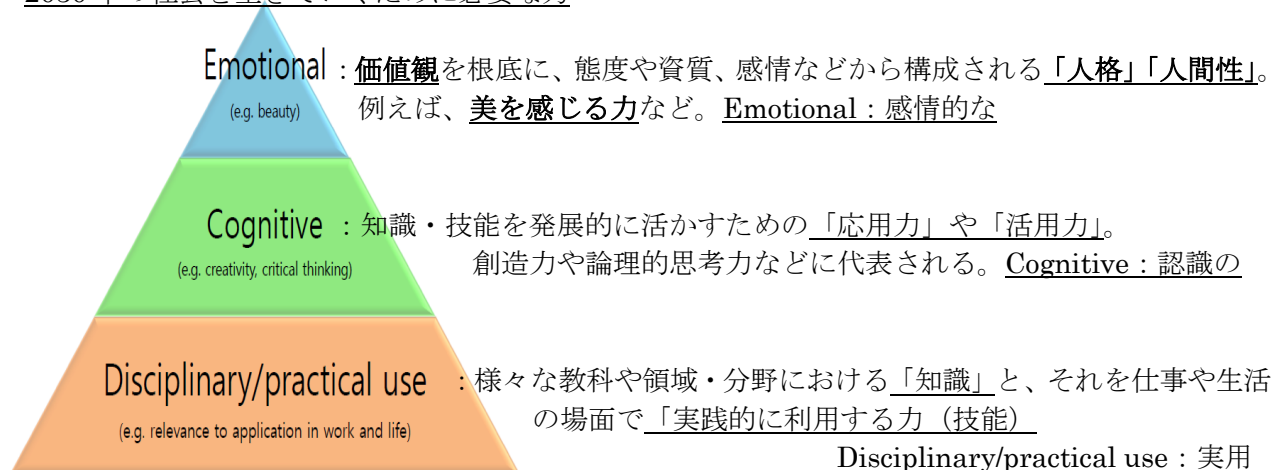
これからは、何も無い原っぱで自ら遊びのルールをつくり、その空間に意味を与えるよう導く原っぱ型の教育が、とても大事になる。

教科書の中だけの学習は基本的に誰が扱っても同じだが、子どもと教師が毎回一期一会の出会いの中で創り出していく学びは無限であり、まさにネバーエンディングストーリーの冒険のごとく、ドキドキワクワクが絶えることはないのだろう。教師も一緒に迷ったり、間違えるからこそ、子どもたちも未知の学びの旅に安心して一歩踏み出せるのではないだろうか。

取組の柱

■learning Compass 2030：Well-being という身体的・精神的・社会的に健やかで幸福

2030年の社会を生きていくために必要な力



[第18回 OECD/Japan セミナー アンソンドレアス・ロシニョライセジャー 2015年時点での議論に基づく概念図]

★令和7年度同様に、今までの取組を探究活動で「生徒主体」の活動で整理し、「感動＝価値」へと意味づけします。そして、限られた時間、限られた人材や予算をどのように有効に活用するかという視点で2つの柱を提案します。

(1)人を育てる「学校」づくり

生徒の価値、「夢や目標」を育てる学校:体験から心を揺さぶり「感動＝価値」を生み出す実践と研究

①総合的な学習の時間の充実 →体験から感動＝新たな価値へ

②生徒が楽しい授業の実践 →生徒主体の授業

生徒が主体の学校

(2)生徒・教職員のウェルビーイングの両立

①教職員には、生徒に「あきらめさせない」の一言

②生徒には、「あきらめない」の一言

教職員・生徒が主体の学校

(1)人を育てる「学校」づくり

生徒の価値、「夢や目標」を育てる学校：体験から心を揺さぶり「感動＝価値」を生み出す実践と研究

ルドルフ・シュタイナーは経験と独自の人間洞察から、知的な経路を通じた学習は教育のほんの一部に過ぎないと考え、感情や意志に働きかける総合芸術としての教育を構想しました。芸術となった教育により、すべての子どもに共通する心身の発達プロセスを適切に整え、その上でひとりひとりのまったく異なる個性をそのプロセスの中に調和的に導き入れる。そのようなプロセスを通して、個性はとらわれのない自由を獲得できると考えたのです。

■発達段階ごとに分ける「7年周期」

シュタイナー教育では「発達は7年周期で節目を迎える」と考えられています。発達段階を7年ごとの3つの段階に分けて、身体・心・頭をバランス良く成長させる教育方法を提案しています。

■身体を育てる周期

0～7歳までの第1期は、身体を育てる周期です。遊びや運動により、しっかり身体を作ることで意志力を育てます。知識を詰め込むのではなく、自分で行動できるような厳選された環境構成を大切にしています。

■心を育てる周期

8～14歳までの第2期は、心を育てる周期です。感情を揺さぶるような美しい音楽や美術に触れて、豊かな想像力や表現力を養います。豊かな感性を持つ大人になるためには、この時期の感情体験がとても大切です。

■頭を育てる周期

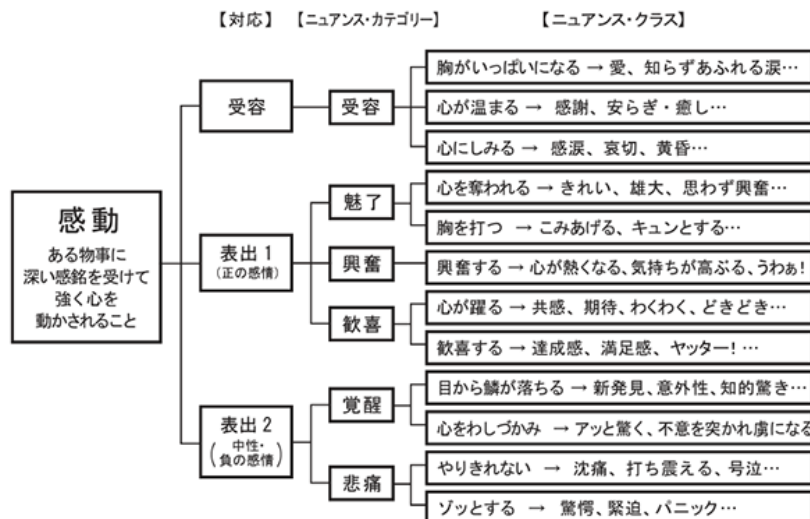
15～21歳までの第3期は、頭を育てる周期です。「頭」とは、単に学力の高さを示すものではありません。思考力や判断力といった、自立に必要な力を身に付けます。自我が発達する時期でもあり、個人の思いを尊重する環境も求められます。

①総合的な学習の時間の充実

→体験から感動＝新たな価値へ

◆各学期と「感動＝価値」との位置付け

* 「感動」：深く物に感じて心を動かすこと（広辞苑）



〔図A. 感動の分類と感動の評価語：NHK放送技術研究所2005年に基づき作成〕

	生徒の姿・成長への「願い」や「希望」	季節感を大切にした式の名称	感動		
			受容	表出1	表出2
1学期	花・風「芽吹き、花が咲き、葉が大きく広げ、爽やかな風が吹く＝色彩鮮やかな生命観と希望の風が吹く、活動期」	4月：花の式（始業式） 7月：風の式（終業式）	○	◎	△

2学期	星・月夜「星の広がりや夜空に輝く月の美しさ＝夜空のように、からだや心の広がりを生む成長期と、挑戦と失敗が繰り返させる停滞期」	8月：星の式（始業式） 12月：月夜の式（終業式）	○	◎	◎
3学期	六花・風光る（かぜひかる）「努力が雪の結晶のように美しく結ばれ、春の光の中、優しい風が吹く＝1年間の結びの月、充実期」	1月：六花の式（始業式） 3月：風光る式（修了式）	◎	○	○

●1学期：花・風（芽吹き、花が咲き、葉が大きく広がり爽やかな風が吹く＝色彩鮮やかな生命観と希望の風が吹く、活動期）→ 思考の可視化

■希望や夢、目標を考える＝考えさせるための体験や感動が必要：この体験が年間を通じて基本となる。

◎感動＝希望や夢、目標による成功体験（表出1：魅了・興奮・歓喜）を感じ取り、見通しをもつ。先人の考え方や行動を知る、調べる（比較・分類・序列化・関連付け・類推 など）

●2学期：星・月夜（星の広がりや夜空に輝く月の美しさ＝夜空のように、からだや心の広がりを生む成長期。挑戦と失敗が繰り返される停滞期）→ 思考の操作化

■自分への期待や可能性を伸ばし、信じる＝考えを広げる体験

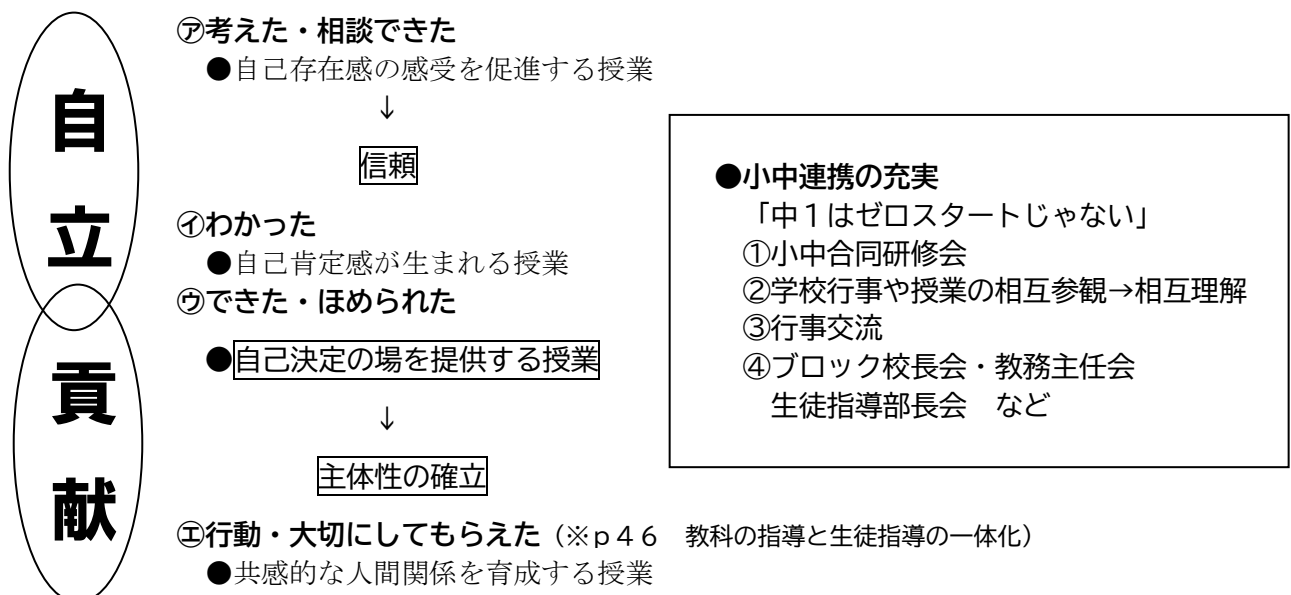
◎感動＝希望や夢、目標を叶えるための努力。挫折や自分を信じることの大切さを思考・体験（表出2：覚醒・悲痛）する（比較・分類・序列化・関連付け・類推 など）

●3学期：六花・風光る（かぜひかる）（努力が雪の結晶のように美しく結ばれ、春の光の中、優しい風が吹く＝1年間の結びの月、充実期）→ 思考の構造化

■自分の成長の確認＝希望や夢、目標をもつ素晴らしさ。

◎感動＝夢の発表し、他者と夢の共有（受容）。表現から振り返る。（見通す・具体化・抽象化・構造化）→課題の更新と探究課程の繰り返し

②生徒が楽しい授業の実践 → 生徒主体の授業

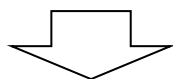


誰にとってもすごしやすい教室・学校を基礎にした
授業 (※p14 生徒指導実践上の視点)

- ① 自己存在感の感受・・・「自分も一人の人間として大切にされている」→「貢献」
- ② 共感的な人間関係の育成・・・「認め合い・励まし合い・支え合える集団」→「貢献」
- ③ **自己決定の場の提供**・・・「自ら考え、選択し、決定する、あるいは発表する(主体的・対話的で深い学び)」→「自立」
- ④ 安全・安心な風土の醸成
→「自立」「貢献」

特別支援教育を柱にした「子どもが落ち着いて過ごせる学校・学級」

- ・ 指示や説明がわかりやすい
- ・ 子どもに多くの活動をさせている
- ・ さりげない「ほめ言葉」が多い
- ・ 教室環境が整っている



不登校対策にもつながる

- ① 特別支援教育を柱にした生徒理解に基づく「わかる授業」(※p45 個に応じた指導の充実)
さまざまな障がいのある生徒の「授業がわからない」との声に耳を傾ける
→2次障がいとしての不登校 (文科省調査では不登校生の3割に発達障がい認められる。)
- ② SR、LD通級教室の効果的な利用・・・学級担任、教科担任との連携
- ③ ふれあいの杜、フリースクール等との連携

(2) 生徒・教職員のウェルビーイングの両立

① 教職員には、生徒に「あきらめさせない」の一言

単に時短だけを目指すのではなく、「やりがい」と改革を高いレベルで実現する職場作りを！
全市 17 時完全下校、超過勤務は月 45 時間以下（毎日 18 時 30 分退校努力）

㊦ ゆとり・・・「改革」

目標を共有した、行事の戦略的な実施と見直し

校是 = 最上位目標

→ 育てたい生徒の姿 → 学年経営の目標 → 学級経営の目標
→ 学校行事の目標 → 毎時の授業の目標

※生徒にどんな力をつけるのか、「生徒のできる」を意識して

「あきらめさせない」を共有する

㊦ リスペクト・・・「改革・やりがい」

対話を通して、立場や考え方の違いを理解し、尊重する。

㊦ 協働・・・「やりがい」

対話を通して、他者と共通の目的を見つけ出す。その共通の目的のために協働する。

誰にとってもすごしやすい教室・学校を基礎にした働き方改革

(※p28 生徒指導の基盤)

○教職員集団の同僚性を大切に育むために

- ① 教職員の受容的・支持的・相互扶助的な人間関係
- ② 教職員のメンタルヘルスの維持とセルフ・モニタリング

○生徒と同様に・・・

- ① 自己存在感の感受
 - ② 共感的な人間関係
 - ③ 自己決定の場
 - ④ 安全・安心な 風土
- が大切

② 生徒には、「あきらめない」の一言

「ああ なんて素敵な日（学校）だ」ところから感動し、あきらめない充実した学校生活を過ごそうとする姿。

- ① 自分の人生を「あきらめない」で生きる姿
- ② 丁寧な言葉使い、自分や人、ものやことに「あきらめない」で対応する態度と気持ち
- ③ 「あきらめない」で授業に学ぶ姿勢
- ④ 「あきらめない」を考える
- ⑤ 「あきらめない」から「ああ なんて素敵な日（学校）だ」が生まれる